第５４号　2014年7月１５日

カトリック仙台司教区・ カリタスジャパン 東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫　編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL022-222-7371　Fax022-222-7378
1）義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2）支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

第４回　東日本大震災仙台教区復興支援全国担当者会議

2014年６月24日（火）～26日（木）、第４回　東日本大震災仙台教区復興支援全国担当者会議が開催されました。前回の総参加者（地元教会信徒を除く）は６７名でしたが、今回はそれを上回る77名の参加となり、加えて地元の信徒の方々も参加してくださいましたので、最終日の午後のミサには、100名を超える参加となりました。みなさまのご協力に感謝申し上げます。

今年も昨年同様、A~Cの３コースに分かれ、初日と２日目は各グループによって別々のところを周り、２日目の夕方に全員が郡山教会に集まりました。最終日の26日は、第３部構成の全体会が行われ、最後に「犠牲者を追悼し、被災者への癒しを求め、復興支援活動に祝福を求める」ミサがささげられ、閉会となりました。

今回は、会議のうちの６月24日、25日に行われたグループごとの視察・講話について、全８ページにわたってご紹介します。

（26日に行われた全体会の内容につきましては、紙面の都合上、次号でご紹介させていただきます。）

Ａコース　岩手・宮城沿岸部コース

カリタスジャパン　　鈴木　まり

６月24日
宮古市～大槌町～釜石市～大船渡市～陸前高田市・気仙沼市経由～南三陸町～米川ベース
６月25日
米川～南三陸町～石巻市～山元町～郡山市

※Aコースは、津波沿岸部を訪問するのが初めての方、この４年目の活動状況を確認したい方などのためのコース。

«6月24日（火）»

10時半に宮古を出発するＡコース参加者は、カトリック宮古教会聖堂に集合。信徒の皆さんが９時から集まり、準備をしてくださった。仙台教区の平賀徹夫司教の先導で、主の祈りと東日本大震災被災者への祈りIIを皆で祈り、オリエンテーションが始まった。札幌教区の上杉昌弘神父から、カリタス宮古ベースの今週の世話人の今野さん、「後方支援部」の梅原さん、根本さんの紹介。ボランティアが少ない時期に調整して1～2名で宮古入りし、世話人とともにお茶っこの活動をつないでおられる。小型バスに乗り込み、大槌町への移動の道すがら、上杉神父より話をうかがった。

◆宮古ベースの活動経過と宮古地区の近況

（札幌教区　上杉神父）◆

震災直後に札幌から宮古教会を訪ねていた折、ちょうど平賀司教様も宮古に来られ、ボランティアを受け入れられるか話し合った。教会は支援物資であふれていて、まずは男性5～6人で寝泊まりしながら支援物資を配った。宮古教会の100人ほどの信徒の方たちに亡くなった方はおられなかったが、小百合幼稚園の加藤園長先生など7～8人が被災され、家を流された方がおられる。残念ながら園児で流された子がいて、お寺でお葬式があったが、不思議な話があって、○○ちゃんが遊んでいたよって、幼稚園の子たちが複数、その日の夕方その子に会っている。

500人以上被災したのは宮古が北の端。教会から300メートルほどで宮古駅だが、100メートル手前まで津波が来て、瓦礫だらけだった。田老地区には二重の防潮堤があったため安心して逃げ遅れた人が多い。

ボランティアの数は減っている。仮設では親戚みたいな感じで、手紙のやり取りもある。松山仮設で空いている部屋を１年借りていて、最後は仮設の方たちも「カリタスさんだけは、いさせて」と署名活動をしてくれた。新築するので古い自分たちの家を使ってと言ってくださった方がいて、現在のボランティアベースは、土地付きで500万円で購入した。撤退するときは仙台教区と話し合い、売ってしまってもよいと考えている。

ベースの活動について。当初、宮古市は県内ボランティアの受け入れだけで、県外ボランティアはお断り。最初の４カ月間被災者に会わせてもらえなかった。山田町や田老地区で泥かきをしたり、信者の方が拾ってきたニーズで泥かきのお手伝いをした。

現在は、２週に一度ごとに仮設を訪問している。毎週だと仮設の人も疲れる。「カリタスさん、来ているよ」「かわいそうだから、漬物持って行こう」と集まってくださる（笑）。ボランティアが行くのをやめた方が楽かと聞くと「そんなことはない」「忘れないで」とおっしゃる。長崎管区、特に沖縄管区からボランティアや司祭が来ていたが「遠くからよく来るね」「励まされる」と言われた。

山のふもとの仮設は交通手段がない。昨年夏ごろ、手伝いに来ていた他県職員が自室で命を閉じてしまった。山田町は100人のうち90人以上が犠牲になったところ。「復興は進んでいますか」という３カ月おきのアンケートに、「進んでいる」という答えが最近初めて50%を超えた。

今年初めから盛土が始まっている大槌町。長崎教会管区が運営するカリタス大槌ベーススタッフの亀岡昇さんが合流し、説明をうかがう。スタートは、まもなく取り壊される大槌町役場前。最初のベースがあったビジネスホテル寿はもう跡形もなく、山を削った土を運ぶトラックが仮設道路を行き交う。その後、町を一望にできる城山公園へ移動。

◆大槌町の復興状況と大槌ベースの活動について
（大槌ベーススタッフ　亀岡さん）◆

ここでは、17m の津波が黒いカーテンのように音もなく迫ってきたという。高くなった波が川を遡上し、車やガスボンベが爆発して、民家が燃えながら流れ、山の木も燃えた。黒くこげて残った旧町役場も、もう一月以内に取り壊しになる。町の中心だった、このあたりの沿岸部は 2m の盛り土がされる。山がどんどん削られているが、大槌は岩盤が多く、山田町からやわらかい土をもらっている。町の悩みは、減る一方の人口で、20 代～50 代の働ける人々は仕事を求めて仙台、盛岡、東京、大阪等に移っている。

大槌には釜石教会の信者さんが 2 人おられる。ビジネスホテル寿オーナーのお一人が同ホテルを最初のベースとして無償で提供して下さり、1～3F をリフォームして使わせていただいた。大槌ベースは、当初はガレキ撤去などの力仕事やわかめ支援をしていたが、現在はどちらも終了し、活動の中心は仮設住宅でのお茶っこと傾聴活動。仮設の支援員と訪問活動をしたり、たこ焼きやホットケーキのお茶っこも一緒に開いている。現在スタッフは、長崎、沖縄、山口、佐賀、北海道から来ている。ボランティアが少なくなってきているが「忘れないでほしい」「カリタスさんは撤退してなかったんだね」と言われるので、ぜひボランティアを送っていただければと思う。

バスでカリタス釜石へ移動。カトリック釜石教会の隣にできた、ボランティア宿泊所兼事務所である新しい拠点で、活動紹介 DVD を観ながらお昼のお弁当をいただき、活動について聴く。出発前に、何名か急いで 2 階の新事務所やボランティア宿泊スペースも見学していた。

◆NPO 法人カリタス釜石（副理事長　伊瀬さん）◆

もう 2～3 年続くお茶っこサロンでは、お茶を出すだけ。何をするかは住民たちにおまかせで、今はエコテープのかご作りに熱中されている。一緒にその場を過ごす仲間たちだけれども、最近家を建てた人もいたり、来年・再来年の災害公営住宅への引っ越しのこともなかなか話しづらい。ボランティアが減少しているが、人が一番の支援と思うし、活動して自分も温かくなる。

ここには「ぷらざ☆かだって」という市民活動センターも併設され、こちらは NPO 法人@リアス NPO サポートセンターとの共同運営の住民の交流の場。@リアスはネットカフェを運営し、カリタス釜石は「ボランティア受け入れ」「依頼受付」というボラセン機能を持っている。

釜石教会信徒として、被災体験を伝えながら活動したい。信徒会館の「ふぃりあ」は、最初の支援物資スペースから地域のオープンスペースになっている。これまでの活動に加えて、健康面の予防として料理教室や健康体操など、地域の人と信者の交流の機会を作って行きたい。

皆さんへのお願いは、毎日待っている人たちがいますと伝えていただきたいこと。１年に１度というこの全国会議の機会でお会いできるだけでなく、ぜひボランティアを送っていただけたらと思う。

釜石から大船渡への国道 45 号線の道すがら、「あっ、鹿」という声が上がる。大阪管区が運営するカリタス大船渡ベースに到着し、出発までの時間、事務局長の深堀崇さん、ベース長のエドガル神父、スタッフの Sr.吉村が出迎えてくださった。深堀さんはここから合流し、移動の途中で陸前高田市も案内いただき、遠くに奇跡の一本松が見える慰霊碑で黙祷した。同じ盛り土作業でありながら陸前高田市と大槌町の風景との違いに、後で参加者から復興の地域格差といった声も聞かれた。

◆大船渡の状況と大船渡ベースの活動経緯
（事務局長 深堀さん、ベース長 エドガル神父）◆

大船渡では自宅を再建した在宅避難者やみなし仮設に住む被災者が多く、大船渡ベースとしてはみなし仮設住宅に集中してきた。はじめは社協を通じて泥出しやガレキ撤去のお手伝いをし、その後漁業の支援、現在では高齢独居の方への支援も始まっている。他団体はどんどん撤退していて、支援が偏らないよう調整する「大船渡アクションネットワーク会議」という活動団体の連絡会があるが、最初は 50 団体くらい参加していたのが、40、30 となり、今では 10 団体にも満たない。大船渡では子どもへの支援が少なく、今後子どもに目を向けた活動を模索、話し合い中。

隣の陸前高田市は、避難場所が平地にあり、大勢が津波にのまれた。山を 40m まで削りベルトコンベアーで土を運ぶ巨大な設備で 5～7m の盛り土を進める。小学生が名付けた、この「希望の架け橋」は 120 億円かけて整備された。1 日に 10 トンダンプ 4000 台も山から運び、ダンプトラックで 10 年かかるものを、3～4 年での完成を目指している。

陸前高田から南三陸へ移動。さんさん商店街で、仙台教区カリタス米川ベースの千葉道生ベース長が合流し、開店間もない食事処「リッチー」（フィリピン人信徒のアメリアさんとお連れ合いのお店）へ。こちらで、米川ベースが南三陸での活動で関わる、NPO 法人奏海の杜（かなみのもり）理事長菊池正明さんから話をうかがった。この日の宿泊は、米川ベースにお世話になる。

◆NPO 法人奏海の杜（かなみのもり）　（理事長 菊池さん）◆

公民館を借りて、障がい児の放課後等の預かりをしている。もとは仙台を拠点に、「CIL たすけっと」という自立支援センターを立ち上げ、「生を受けた以上自分で生き方を選択できるよう」20 年活動してきた。事務所は太白区の長町にあり、津波の被害はなかったが、地震被害があった。脳性麻痺で電動車椅子の当事者と避難所へ行ったが、何もアナウンスなく、トイレも和式で使えない。排泄は大切。避難所には、いられなかった。事務所は半壊で荒れ放題だったが、石油ストーブで暖は取れるしお湯も沸かせる。一人暮らしの当事者が多かったので、インスタント食品を持ち寄って 10 人の当事者が集まった。

ライフラインが復旧すると、東京と連絡がついて、「おたくはいい状況なんだから他の障がい者の支援をしたら」と言われて、3 月 16 日から「困っている障がい者への支援をしています」とマスコミを通

じてや、出向いた先の役場やボラセン、避難所で伝えて、まずは救援物資を配った。4 月 11 日に、12 団体で「被災地障害者センターみやぎ」を立ち上げた。私たちの支援の特徴は、個別性に応じた支援。排泄は大切という話をしたが、大人用のおむつの需要は高かったものの、一人ひとりに合ったサイズが要る。そうした個別の要が高いものに応えるようにした。

高速が開通して行ける範囲が増えてきた一方で、車も増えて渋滞がひどくなり、現地に拠点を置こうと石巻、山元で、移動の問題や日中の預かりニーズに応えるサービスを開始。子どもがいるためお母さんが出かけられない、病気になっても動けない。私たちが見ている間、お母さん、病院に行ってくださいと預かるようになった。南三陸では 2012 年の夏休みに、仮設住まいでたくさんの我慢をさせられている子どもたちのための場所だけでも作ろうというのが最初だった。反響は大きく、放課後の預かりを今まで継続している。もともと町内での障がい児へのサービスはゼロ。ここの子どもたちは、気仙沼の支援学校まで 1 時間～1 時間半かけて通っている。

重度であればお母さんが面倒を見きれなくなった時点で遠くの入所施設に入らないとならなくなる。ちょっとした支援があればここに住み続けられる。私たちは全国からの助けを受けながら、活動資金は寄付金でほぼ賄っている。地元のスタッフを 4 人雇用し、もともとなかったところに手探りで活動してきた。寄付だけでは今後 10 年はやっていけないので、なんとか事業認可を取っていきたい。

米川ベースの荒川直人さんには、毎週木曜の放課後預かりに来てもらっている。エネルギーあふれる子どもたちも荒川さんが大好きで、荒川さんの回りにからみあいながら遊んでいる。でなかったら私たちもやっていけなかったかもしれない。「たすけっと」もメンバーたちが、2 年 3 年経って疲れたのかなと思うが、今は自分を取り戻す時になっている。自分も今は仙台から通っているが、事業化したら南三陸に住んだ方がいいかと仮設を借りる話をしている。

«6 月 25 日（水）»

米川教会でのミサ、米川ベースでの朝食後、南三陸町へ出発。車中、千葉さんから、これから訪問するデイサービスセンター支援の経緯やベースの活動について話をうかがい、南三陸町戸倉デイサービスセンターへ。米川ベーススタッフから「仮設のお茶っこでお会いするおじいさん、おばあさんの顔を今日見ることができた」という声も聞かれた。

◆南三陸町の近況と米川ベース活動（ベース長　千葉さん）◆

南三陸町では、2018 年に災害公営住宅が完成予定となっている。町の基盤産業は漁業だが、ベースの活動としては、漁業支援以外にも田畑の石拾いやお茶っこ、仮設住宅に住む高齢者対象の換気扇の掃除や仮設の引っ越しの手伝いなどを行っている。チリ地震の後に寄贈されたモアイ（「未来を見る」という意味）、新しいモアイ作りも最近の活動の一つで、町起こし的な活動に発展していて、役場、病院、公民館などに設置されている。後方支援をされている皆さんにお願いしたいことは、ボランティアの派遣と、地域で物産展をやっていただくこと、そして、一度来て、見ていただくこと。スタッフも募集中で、長期ボランティアも大歓迎。

◆南三陸町戸倉デイサービスセンター（南三陸町社会福祉協議会　三浦課長）◆

南三陸町は、平成 17 年 10 月 1 日に旧歌津町と旧志津川町が合併してできた新しい町。志津川町のデイサービスセンターが津波の被害を受け、震災後は歌津のデイサービスセンターで受け入れてきたが、地域によっては片道 20 キロの距離がある。志津川地区内にもデイサービスを作りたいと、カリタスさんの支援、復興支援財団からの融資、国の補助金を受けて、最初に入谷のデイサービスが 25 年 3 月に完成した。当初、毎週土曜日・日曜日を定休日としていたが、利用者が増え、現在は土曜日も開所している。戸倉は、今のところ曜日によっては利用者が少ない日もあるので月～金曜日開所している。

南三陸町社協で 3 か所のデイサービスセンターを運営しているが、まだまだ足りなければ、毎日開所するようにしていきたい。1 か所職員 5 名、うち看護職 2 名、介護職 3 名。また送迎サービスは無料で行っている。1 日の定員があるので、週 3 回使いたいという人もいるが、週 1 の人も使っていただくために、ケアマネージャーと話をさせていただいている。仮設から来る人が多いかもしれないし、一人暮らしの方も来ている。子どもたちとの交流は、ここ戸倉ではまだだが、入谷では幼稚園児を年数回呼んで交流している。

また来年、その後にもいらして、復興した南三陸町をぜひ見ていただきたい。

次の目的地、石巻へ。4 回の全国会議で初めて、仙台教区のカリタス石巻ベースに全国からの参加者が立ち寄った。スタッフやボランティアの紹介、石巻ベース内に併設される仙台教区滞日外国人支援センターのスタッフと活動紹介の後、お昼の弁当をバスに積み込み、石巻ベース長の Sr.細谷朋子も合流し、次の目的地、山元町へ向かった。

◆石巻ベース（ベース長　Sr. 細谷）◆

石巻の人口は 15 万人。4000 人の死者・行方不明者が出ている。2005 年に 1 市 6 町が合併して今の石巻市になった。以前の町の機能が残っていれば、もっと早くに支援が届いていたと言われる。駅前のシャッター街は最近のことではなく、200 カイリ問題で漁業が衰退してからと聞く。

石巻ベースは、2011 年 3 月 24 日、最初はカトリック石巻教会を拠点に活動が始まった。瓦礫撤去や家の片づけ、門脇中学校避難所でのお湯出しなど。門脇中学校で会った方たちとは今も仮設のお茶会でお会いする。現在の石巻ベースは、年末年始以外、9 時半～17 時まで開けている。来られるのはほとんど常連さん。3 年経ってやっと重い口を開く方もいらっしゃる。スタッフの心のケアも大切。宗教色は出していないが、答えがない疑問を投げかけてこられる方もいらっしゃる。お茶っこは、東松島 1 か所、石巻 5 か所の仮設住宅にうかがっている。引っ越しても元の仮設のお茶っこに来る方もいる。今後、災害公営住宅では新しい自治会ができ、社協が入る。カリタスもお手伝いを申し出ている。

ボランティアに語ってくださる語り部の方の DVD を準備中で、活動だけでなく被災地巡りも実施している。

宮城県南部の山元町では、カトリック東京ボランティアセンター（CTVC）の山崎恵さんが出迎えてくださり、ご住職の坂野文俊さん、センター長の藤本和敏さんから話をうかがった。CTVC は 2012 年 5 月に東京教区の青年隊のキャンプを開催。亘理教会からテラセンにつ

いて聞き、その後活動に参加。毎週土曜日、地元の方々が地域をどうしていくか話し合う場にも、山崎さんや、東京教区が運営するカリタス原町ベースからスタッフが参加している。

◆山元町おてら災害ボランティアセンター（テラセン）
（曹洞宗普門寺ご住職 坂野さん、センター長 藤本さん）◆

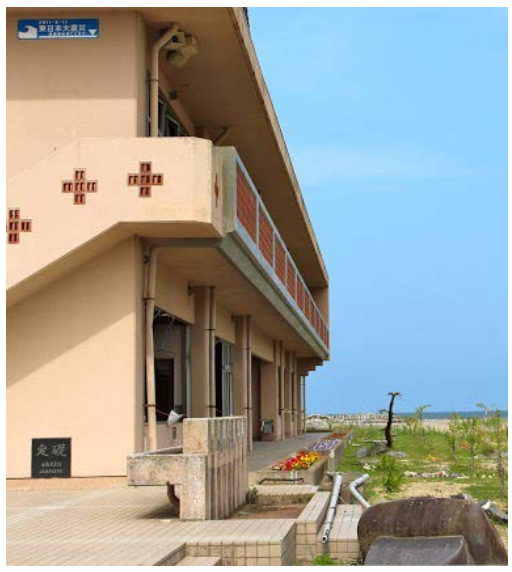
震災から３年、お寺にもいろんなことがあった。震災から４日後に来た時は、本堂に６畳一間掘りごたつのある部屋が屋根ごと入っていた。常磐線沿岸部は８月末まで立ち入り禁止区域となっていたが、無視してガレキの片づけを始めて５月まで２カ月ほど毎日一人でやっていた。この当時、住民は許可証をもらって、使えるものや必要なものを探しに来ていた。自分の様子を親戚が見て、無許可でバス１台出して東京からボランティアを呼んでくれた。藤本さんもそれを聞きつけてきた一人。檀家さんの家の再建も必要なので、本堂は再生しないことに決定した。なのに、今、皆さんがいる間が残っているのはなぜか。

20 歳でここの住職になった時は、隣にある本堂と、物置だけ。しかもぼろぼろで、雨の降る日はぽたぽた落ちる音の中、お経をあげていた。ここは昭和の初めから住職がおらず、父が掛け持ちで見ていた、檀家 100 軒に満たない寺だった。住職になってから自力で直してきて、その様子を見た檀家さんたちと 25 年、一緒に寺の方向性を決めてきた。震災 5～6 年前に環境整備事業として寄付を集めて、１年前に庫裏ができて、やっと住職が戻ってきたのにという、震災直後の檀家さんの悔しさもある。藤本さんが来てからテラセンを立ち上げ、ボランティアたちと、まずはお墓、砂とガレキを片づけて石を元あった場所に戻した。そうしているうちに、檀家さんたちが「本堂の屋根を持ちあげるぞ」と、再生する方向になってきた。２階が残った家から畳や建具をもらい、壁は剥がして桟を掃除し、石膏ボードをはった。電気も最後だけ電気屋さんに頼んだが、その他は自分たちでやり、とにかく安くあげた。

僧侶は動かないといけない。お釈迦さまと弟子たちの働き方も、こうだったのではないか。震災からＴシャツとニッカ姿で、作務衣は着ていなかった。今日の作務衣姿は、山崎さんも初めてでびっくりされているかと思う（笑）。震災当時は無力だった。生きているけれど、死んでいるような状態で、檀家さんに声もかけられない、何もできない自分が悔しかった。檀家 60 人くらい亡くなっている。自分にできることは、ガレキを出して、通路を作ること。一人でもいいから救いたい、希望を持ってもらいたいと、毎日お経をあげながら泣いていた。それでいて、檀家さんが来ると「大丈夫」と声をかける、うそつき坊主だった。立ち入り禁止区域で本当はだめなことだったかもしれない。でも檀家さんに希望が戻った。元の土地には戻れなくても多少なりとも絶望が希望に変わればと思う。震災が良かったとは言えないけれど、大変なだけではない、知り合えた人が大勢いる。CTVC の皆さんもそうで、このご縁を大切にしていきたい。

（藤本さんの）家は名取市。山の方で停電だけだったので、名取の災ボラに行きはじめて、山元町では一番最後に災害ボラセンが立ちあがったが、県内のみの募集、一輪車もない、（ガラス破片対策の）革の手袋もない、という状況だった。まだまだ家があって、年配の人たちがたくさん残っていたのに、町に言っても入ってくれない。住職に話したら、寺を自由に使っていいですよと言って下さった。道具がないので最初はお茶碗で泥をすくっていた。ここは民設民営と言われるが、気持ちを持った人たちが集まり、未だに続いている。うれしいことは、みんなが知恵を寄せ集めて、ものすごくたくさんの人の手がかかっていること。他の寺は亡くなった方の戒名で一億円集めたりもしているが、ここではほとんどお金は動いていない。台所脇の柱にメッセージが書いてある。檀家の方の古い家から持ってこられた仏壇の芯の木。家がなくなってもお寺に残る。この辺りの家の２階にあった材料を使わせてもらっていて、地域の宝の一つかなと思う。

テラセンのお二人のお話の後、CTVC 山崎さんもバスに乗り込み、浜近くの中浜小学校を訪れてから、一路、郡山教会へ向けて出発した。



震災後、手つかずのままの校舎
←校舎２階には、津波到達地点の印

郡山教会で B、C コースと合流し、参加者全員で郡山教会の仮設支援活動を聞いた後、交流会となった。

全国担当者会議 A コースに参加して

長崎教区　　下窄　英知 神父

この度縁あって、第４回東日本大震災仙台教区復興支援全国担当者会議に初めて参加させていただきました。視察にも参加し、長崎教会管区が担当している大槌町には二度目、徐々に南下しながら、初めてのベースも訪問できました。

印象に残ったのは、宮城県山元町「テラセン」（お寺が運営している復興支援拠点）です。お近くの方、ぜひ訪問なさり、直接住職の口からお話を聞かれることをお薦めします。

岩手県から宮城県にかけてかけては、当初の緊急支援からすると、ずいぶん落ち着いてきており、復興への希望も感じられる視察となりました。

しかし、福島に入ってからの会議では、今も厳しい状況があることを現場の生の声で知ることが出来ました。長崎の原爆投下後にあった被爆者への偏見と差別が思い起こされ、被爆に関する知識が皆無に等しかった当時と同じようなことが起きていることに、心が痛みます。

長崎と東北は距離的に遠く離れていますが、教区を挙げて祈り続けています。皆さまの声が長崎にも届くよう、できることをやっていきたいと思います。

最後に、今回わたしたちを地元にお迎えくださいましたすべての人に、心から御礼を申し上げます。ありがとうございました。

Ｂコース　福島北回りコース

カリタスジャパン　　横山　葉子

6 月 24 日
郡山教会～二本松市～川俣町・飯舘村経由～南相馬市～原町ベース
6 月 25 日
原町～南相馬市小高区・浪江町視察～川俣町経由～福島市～郡山市

«6 月 24 日（火）»

Ｂコースは、午前 10 時にＣコース参加者と共に郡山教会に集合し、そこで福島県内自主避難者のお話を聞く。その後、二本松市へ移動し、二本松教会で、中通りの農業の状況について学ぶ。「福島やさい畑復興プロジェクト」代表柳沼千賀子さんより活動概要の説明を頂いた後、同活動に関る有機農業研究会会長の大内信一さんよりお話をうかがった。

※大内さんの講話は、小野武さんの文章をご参照ください。

正午過ぎ、二本松教会から南相馬市へと向かう。途中、川俣町で昼食を取り、警戒区域となっている飯舘村を視察しながら、南相馬市原町へと移動。ＣＴＶＣカリタス原町ベースへ到着後、スタッフから活動の紹介をしていただき、その後、相馬高校放送局顧問・渡部先生から高校生の体験を聴く。

※相馬高校の渡部先生の講話は、小野武さんの文章をご参照ください。

◆飯舘村（見学のみ）◆

避難指示解除準備区域で除染作業が進んでいる地区を見学。飯舘村は帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除準備区域と入り混じっている。村行政ベースで「除染作業員のスクリーニング活動」や「グループ老人ホーム」にも取り組んでいる。

１日目（２４日）は、原町ベースで地域連携者やボランティアを囲んだ交流会を行い、そのまま原町ベースへ宿泊。

«6 月 25 日（水）»

原町教会でミサ後、原町ベースで狩浦神父様を囲んでの朝食・歓談。8 時半、被災地視察へと出発。南相馬市より６号線を南下し、南相馬市小高区、浪江町などを視察。小高区では、同区にある同慶寺にて、檀家の桜井さんからお話をしていただく。

◆活動連携団体のお話　（講話　同慶寺檀家 桜井勝秀さん）◆

行政は三年計画を立てているが住民の不安は山積み。足りないものは情報へのアクセス、医療や社会サービスへのアクセス。３つの願いは「修復・除染」「女性や子どもたちも安心して暮らせる地域となること」「トラブルのない発電管理」。同慶寺さんとカトリック教会は、被災直後からの情報共有を通じて、互いのコミュニティを通じて連携してきた。宗教の垣根を越えて「信仰が中心の生き方」で心を合わせて活動している。

◆南相馬市、浪江町境界の「希望の牧場（吉沢牧場）」訪問
（放射線量が高いため希望者のみ）◆

同牧場浪江農場で代表吉沢正巳さんからお話をうかがう。
「生き残っている牛は原発事故の生きた証人、その被ばく実態調査研究を通じて放射能災害予防に役立てる貴重な科学的データを集積すること」を目的とし、大学と連携しながら研究した情報を発信する役割を担い、これらの残された牛を飼育している。

11 時頃、福島市へと移動し、松木町教会にて昼食をとりながら松木町教会「愛の支援グループ」の宮代仮設住宅での活動を紹介していただく。その後、宮代仮設住宅へ移動し、自治会役員の方にお話をしていただき、仮設内を訪問させていただいた。

◆松木町教会訪問：（講話　代表 鈴木キミ子さん）◆

松木町教会「愛の支援グループ」は、被災直後から傾聴活動に取り組み、現在のお茶っこ活動につながっている。

◆宮代仮設住宅訪問
（講話　仮設自治会役員 佐藤恵一さん、吉田武義さん）◆

浪江町から避難されている 11 仮設の一つ。同仮設は、第一と第二（ペット同居世帯）に分かれており、松木町教会のお茶っこ活動は第一仮設で定期的に実施されている。

＜現状課題＞

・仮設住宅資材は中国製のため、修繕工事のたびに困難が生じる。行政は受けたがらないので、直で業者と交渉し修繕できることを確かめてから行政へと話を繋ぐ現状。
・45 世帯中 17 世帯が一人暮らしの高齢者、体調不良時など隣近所の住民が助けているが、一人暮らしということで処置が遅れ、死に繋がるケースもある。自治会は、体の不自由な住民を対象に定期訪問している。
・出身地区によって悩みが違う。
　帰還困難区域　⇒最低でも６年は戻れないと言われており、行政の計画が進まず先が見えない不安。
　避難指示解除準備区域
　　⇒除染作業はさほど進んでいない。戻ったところでネズミの繁殖、異臭などで簡単には住める状況でない。先に再び警戒区域となることを危惧し、住宅再建設や修繕に出費できないもどかしさがある。
・たとえ、もとの場所に帰宅できる日が来ても、インフラ整備の滞り、医療サービス へのアクセスが難しい点、若者の雇用問題などが残された大きな課題。

＜仮設コミュニティ住民の様子＞

・もともとはバラバラの集落から集まっているが、住民同士は助け合い、気持ちよく挨拶を交わしながら暮らしている。しかし、それぞれに置かれている状況も違い、持っている希望も違い、可視化できない内面的な分断もある。
・高齢者デイサービスは週２回。医療機関へも路線バスが出ている。
・周辺地域主催の祭りを通じた地域との交流やパターゴルフオープンデイなどが設定され、これらに参加している住民もいる。

福島市内を出発し、郡山教会へと向かう。郡山教会へ到着後、全コースそろったところで、郡山教会信徒の仮設傾聴活動報告を聞き、その後、夕食・交流会を行って、25 日（2 日目）を終えた。

福島の人々の叫びを私たちの叫びに

仙台教区サポートセンター　　小野　武

６月２４日から２６日に行われた第４回全国担当者視察・会議に、初めて参加させてもらいました。

震災後、私は福島に足を運べば運ぶほど、「福島の実態」を一人称で受け止めなければいけないと感じていました。そのため、今回はＢコース（福島北回り）に参加しました。その中から、「福島の農業の現状」と「高校生の演劇を通じての叫び」について。

◆二本松有機農業研究会会長　大内信一さんのお話◆

大内さんの家は、農家として300年続いていて、16代目にあたるそうです。２０１１年３月１１日の原発事故発生当時、二本松では、雪が消え、畑に種まきが始まっていました。原発事故により、“耕すな　蒔くな　植えるな　穫るな　外に出るな”とのお達しがありました。そして、そのひと月後の２０１１年４月１２日に作付け可能の判断が出されました。大内さんは、福島を守ること、それはまず、土地を守ること、そして、花と作物で、田んぼや畑を飾りたい、それが福島の進む道だと話されます。

農業は、土と作物との共同作業。いろんな野菜を少しずつ、順序良く作ることで、土の力をよみがえらせています。農薬も化学肥料も一切使わず、麦、キャベツ、ネギ、ニンジン等年間50種の作物を有機栽培しています。　“大内さんは、福島を日本一安全な農産物の生産地にしたい“という夢を持っていると話されます。

収穫された作物を放射能に汚染されていないか、検査をして出荷しています。福島全体が放射能に汚染されているような、風評被害を聞くと残念でならないと話しています。

この話を聞いて、私は、大内さんが農業のプロフェショナルとして、安全でおいしい野菜を、責任を持って、消費者に届ける使命感を持たれ、風評被害に戦われている姿に感銘しました。全国の消費者の方には、スーパーなどで生産地福島と書いてあるだけで敬遠する人がいると聞きます。その人たちに大内さんの、この姿、思いを伝えることが私たちの使命と感じました。

◆福島県立相馬高校　放送局　顧問　渡部義弘先生のお話◆

原発による放射能問題を予見した、若松丈太郎作の「みなみ風吹く日」を生徒が朗読したものを聞いた後に、相馬高校の演劇部メンバーと同校放送局が部活動として演じた「今　伝えたいこと（仮）」のＤＶＤを鑑賞しながら、渡部先生からお話をうかがいました。

震災から１年後、福島県内の高校が舞台、主人公は３人の高校生。震災後に高校に入学して仲良くなった３人。お互いの被災状況を良く知らなかった。ある日、一番明るく振舞っていた望美が突然自殺。自殺した原因について思い悩み、自分たちが抱えていた被災体験を打ち明け始める。インターネットなどで伝えようとすると誹謗中傷。怒りを爆発させ“誰かお願いです!　私たちの話を聞いて下さい!　子どもの訴えを無視しないでください!　今ある現状を忘れないでください!”とストーリーが展開していきます。脚本担当の生徒は、「酪農や農業、漁業をしている方が、震災後に自殺してしまうニュースが流れる…もし学生だったらと取り組みました。」照明担当の生徒は、「怖いって言われるけど、福島で生きている人は大勢いる。もうどうしょうもないと思いながらも、今あるこの状況で…生きています。その中で報道されずに忘れられていったり、ネットとかで悪口を書かれたりすると…そうしないでほしいです」

車のナンバーを見て投石されたり、転校先で原発と呼ばれたりしている現状があるようです。また、結婚のとき福島出身だということで断られる恐れも心配されています。

渡部先生は、生徒たちが演劇を通して、原発の悲惨さを訴えています。ともすれば、震災からの自立した姿を訴えるものが好まれますがハッピーでない現実を知って欲しいと訴えています。

原発は、安全神話の欺瞞と過疎地域への経済的な潤いを目玉に、大都市への電源供給のために展開されてきました。この福島の実態に学び、一人ひとりが日本におけるエネルギー施策に係る問題だと一人称でとらえることが求められています。例え、生活のレベルがダウンしても、将来に向けて私たち一人ひとりがこの叫びに答える時が、今だと思います。

福島の復興には、これから何年かかるか判りませんが、自分の問題として叫び、寄り添い続けていければと思っています。

Ｃコース　福島南回りコース

さいたま教区サポートセンター　　薄葉　智子

６月24日　郡山教会～白河市～いわき市
６月25日　いわき市～さいたま教区「もみの木」
～楢葉町・富岡町方面視察～郡山市

≪6月24日（火）≫

雨が心配されたが傘をさす必要もなくプログラムが開始された。まず、Ｂ、Ｃコース参加は全員カトリック郡山教会に１０時集合、新しくなった「東日本大震災被災者のための祈りⅡ」を唱え、プログラムが開始された。

まず講話１として、カトリック会津若松教会信徒で、自主避難の方を支援している品川美枝さんより支援の経緯の説明を受ける。

会津若松には福島県大熊町など行政ごと避難している人が多いが、郡山市などからの自主避難者も多い。しかし、自主避難者については行政側も人数などすべてを把握できておらず、会津若松教会信徒約２０名程度で、知り合った３～４名の自主避難者の物資支援を始めた。その後、現在は自主避難者の方達が立ち上げたグループのお手伝いという形で、料理作りや合宿などを共にしながら支援を続けている。

続いて郡山より会津若松に自主避難をしていらっしゃる酒井信裕氏のお話を聴く。

◆講話１　県内自主避難連絡会　代表　酒井信裕氏◆

４人家族で、両親と一緒に住むため郡山へ引っ越して来た矢先に震災に遭う。その後福島第１原発の事故が起こり、住居のある郡山と避難先往復のガソリン量を考慮すると、猪苗代が限界と考え３月１５日に避難をする。

帰還困難地域の被災者の方とは違い、ご近所に引っ越しの挨拶の時、夫の転勤と夫人は説明したが、その後酒井氏が新聞などに自主避難者の話など顔写真も出てしまい、夫人は知人を裏切った気持ちが続いていた。自主避難の人は知人を裏切ったような辛い気持ちでいる人が大半だ。

福島第１原発の事故の収束は目途がたたず、子どもの被爆への不安を考えると本格的に自主避難するしかないと思い始め、線量の低い会津若松に辿り着く。震災後は小学校の給食に使用する食材の心配、プールや屋外活動の不安などで保護者間でも線量の認識などの考えに違いがありトラブルが起きていた。今現在でも学校から屋外活動をさせるかなどのアンケートが児童ごとにおこなわれている。

また生活費などの資金面でも不安が続いている。行政からの救済はないが、自主避難をしている人は後ろめたい気持ちでいる人が多く、

自ら支援してほしいと声を上げることができない。そのため嘆願書を何度も行政に提出し、県からやっと一部の人に家賃補助が出るようになった。

当初５０世帯程度が連絡会の呼び掛けに集まっていたが、現在は３０世帯に減少している。二重生活の費用負担が大きく、地元に帰る家族もいる。

コミュニティ作りの一役を会津若松教会が担っていることで、自主避難者の方たちとの繋がりをより一層深めて、心の支えになれば良いと感じる。

講話２をうかがうため、白河教会へ移動する。「白河みみずく」事務局長・和知氏のご挨拶のあと、代表の金澤弘子氏の話をうかがう。

◆講話２　傾聴グループ「白河みみずく」代表　金澤弘子氏◆

震災後８月に傾聴グループを設立。中田グラウンド仮設住宅の南相馬市、浪江町の被災者、郭内仮設住宅の双葉町の被災者へ週１回の傾聴活動を続けている。

震災当初は笑う事が必要とのことで、「寅さん」の映画会を開催したり、ＣＴＶＣや全国から寄せられた物資を配布したりして、傾聴活動以外のこともしていた。

現在は、毛糸メーカーからの援助で届いた毛糸を使って、「エコたわし」作りをしている。

また、双葉町には古くから「ダルマ」製作が続いているが、白河市にも「白河ダルマ」が産業としてあり、白河ダルマの協力によって「双葉町の復興の黄色いダルマ」を作り、被災者の方がイベントなどで販売を行っている。

また、農家で使っていない家屋を提供してもらい、「原発の怖さ、福島の現状」を発信する場所として「知足庵」を７月２８日に開所する。

講話３はいわき市沿岸部で津波被害を受けた方たちが多いいわき市内郷の雇用促進住宅仮設を訪問。自治会長の大河内喜男氏に話をうかがう。

◆講話３　雇用促進住宅仮設自治会長　大河内喜男氏◆

いわき市では沿岸部被災者のための復興公営住宅を建設中で、堤防を 4.7m から 7.2m へ嵩上げし、防潮堤と公営住宅の間に防災緑地が整備されるそうだ。岩手県、宮城県に比べると順調に建設が進んでいるように感じる。薄磯地区の復興住宅では既に入居が始まっている部屋もある。今後来年３月頃までに入居が順次進むので、引越し業者が不足気味だ。現在の雇用促進住宅仮設は、再来年には復興公営住宅にリフォームされる。

夕方より講話４の福島の漁業の状況を聴く。
お話をされたのは、組合長の矢吹氏といわき仲買組合会長の遠藤氏。

◆講話４　いわき仲買組合 代表理事組合長　遠藤浩光氏
いわき市漁業協同組合 代表理事組合長　矢吹正一氏◆

震災後は将来の人生設計ができなくなり、不安な時期もあった。また、若い漁業従事者は、将来の青写真を引く事が出来ず、漁業から離れた。

しかし、試験操業が 2013 年 10 月より始まり、明かりが見えてきた。若い漁業従事者も少し戻ってきている。操業できない間は、海底の瓦礫撤去などの作業に従事して、収入を得ている。

試験操業では、アワビや魚を週一回採取する。３８種と魚種も限っていることと水深 135m 以下の深い所から取って、サンプル計測をしている。原発事故当時よりは確実に数値は下がっているが、50 ベクレル以下という福島県独自の基準で、絶対に安全であるという自信をもって出荷している。風評被害（福島の魚に対する）が一番怖い。

また出荷の際には検査証を添付しており、計測データは地元漁業組合と海洋大学のデータを用い、東京電力の計測データは使用していないそうである。

«6 月 25 日（水）»

６時にいわき教会にてミサ。その後バスで福島第１原発に近いところ（警戒区域 10 ㌔圏）まで移動。移動のバスの中で双葉郡楢葉町・生活支援課主幹の半谷（はんがい）喜代美氏より現在の状況などの話を聞く。

帰町をした広野町をまず通過する。広野町では現在も除染を行いながら、元の住居などに戻った人もいて、生活している様子がうかがえる。帰還困難地域の人でも地元に近いとの事で、広野町に新居を構える人もでてきている。

楢葉町に入ると、避難指示解除準備区域になっているため、人の姿はない。「ならは道の駅」は現在警察が使用しており、多数の警察車輌がパトロールに回っている。

楢葉町は２７年春に帰町を宣言している。帰町後は今までのような補償が何もなくなり、生活面に不安を感じている人も少なくない。現在期間を限定して特例宿泊を実施している。２５年の年末に行った時には８泊９日で、４００名が参加したが、本年ゴールデンウィークに１５泊１６日で実施した際は、人数が大幅に減っていたそうだ。人の気配が少ないため寂しく、参加日程を繰り上げて仮設住宅へ戻る人も多かった。

町の中には現在２２カ所の除染仮置場があり、木々と同じような緑色のシートが掛けられてはいるものの、異様な風景である。今は生活圏のみが除染作業をされており、山などの除染は行われていない。

楢葉町役場に寄り線量計測の専門の方より説明を受け、空間線量と地面で図る線量との差をご教示いただく。

国道６号線を北上し富岡町に入る。富岡町は帰還困難区域のため、今まで通過した広野町、楢葉町とは全く様子が違い、人の気配は全くなく沿道の草なども伸び放題である。富岡駅でバスを下車し、付近を見学した。帰還困難区域のため片付けも出来ないまま震災当初より荒れている。

いわきへ戻る途中、夜ノ森（よのもり）付近を通る。道一本を挟み、右と左で帰還困難区域と準備区域に分かれる。震災前は、近所同士の往来があったが、今までのコミュニティが道一本で崩れてしまう。

昼食をさいたま教区ベースの「もみの木」で済ませ、午後、講話５のために福島第一聖書バプテスト教会に行く。

女性信徒の持立（もったて）氏の話をうかがった後、聖書を交えながら佐藤牧師の話を聞く。

◆講話５　日本バプテスト教会　佐藤彰牧師◆

佐藤牧師は千葉での東京基督神学校の卒業式出席中に震災に遭う。福島第１原発事故後の３月１５日、千葉より物資を積み込み、約10時間をかけ会津にあるチャペルへ到着し、大勢の信徒と再会する。信徒の中には福島第１原発に自宅が近いとの事で、被爆検査を受けやっと合流できた方もいるとの事。６０名の大所帯が避難生活を共にする事となり、会津より更に北上し、米沢の恵泉キリスト教会米沢チャペルへ辿り着く。全員、着の身着のままの避難であったが、全国の信徒より救援物資やガソリンが届けられる。いつ帰宅できるのか検討もつかないが、支援されたことにより豊かな気持ちを皆が持ったようである。

家族単位で過ごせる場所が必要と判断し、２週間後には東京都奥多摩の「福音の家キャンプ場」に辿り着く。地元の人が用意してくれたランドセルを背負って子供たちはそこから学校へ通った。日曜日の礼拝には佐藤牧師夫妻が思う以上の人が集まり、驚いたとの事。

佐藤牧師は、信徒の就職や、転居先の決まった人には教会転籍の準備などに忙しい日を過ごす。慌ただしく毎日が過ぎていくがこのままで良いのか疑問に思うようになる。

一緒に避難を続けている信徒と今後の方針を話し合ったところ、福島へ帰りたいとの意見が半数以上いた。できるだけ大熊町に近い所を考え、いわき市の不動産業者を当たる。

宗教団体というだけで新興宗教と間違われ、土地探しは大変だった。地震、津波、原発事故、長い避難生活と苦しみばかりが続くが、運よくいわき市泉という駅から近い所に土地を見つけられ、教会の傍には高齢信徒のためのアパート用の土地も見つかった。

佐藤牧師のお話では、「苦しい事の先には必ず明るい光が射す」という、励ましの力を頂いた。

鳥が翼を広げたような形の教会堂　（大熊町の方を向いて建っている）

郡山教会へ移動。全コースが揃ったところで、郡山教会で支援をしている鍵谷さんの話を聴く。

◆郡山教会　鍵谷和子さんのお話◆

富岡町被災者４００世帯が入居している仮設住宅があり、郡山の農業試験場跡地に建てられた「おたがい様センター」で支援活動が行われている。

鍵谷さんは個人としてその中で行われている「編み物教室」に参加して、被災者の方と共に編み物をしながら、お話を聞くようにしているとのことで、気軽に接するよう心掛けているそうだ。移動販売車も来るが、買い物ツアー、お花見、バス旅行なども計画実行されており、自治会ががんばっている。

最終日には郡山教会で福島県小教区の取り組みについてのお話を各小教区の方より聴く。

どの支援方法が最善ということはなく、それぞれの地域に見合った支援方法がある事を確認した。そして、被災者の方と長く寄り添い、忘れずにいる事の大切さを改めて感じる３日間であった。